

SINAPIS

社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

月刊シナピスニュースレター

Vol.
105

2025. 2

年間テーマ ～あきらめない 平和への道を ともに～



1995年の阪神・淡路大震災から30年。1月17日早朝に神戸市内のたかとり教会でおこなわれた、仏教界の僧侶の方々との追悼式

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪高松大司教区
社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784 FAX/06-6920-2203
Email/sinapis@ostk.catholic.jp
ホームページ/<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>



「希望の巡礼者」の旅

聖ヴィンセンシオ・ア・パウロの愛徳姉妹会 シスター マリアラン

2025年の聖年は、2024年12月24日の夜に聖なる扉が開かれることによって、正式に始まり、教会は「希望の巡礼者」としての旅を始めました。

日本人であろうが、ベトナム人であろうが、白人であろうが、黄色人種であろうが、信仰する宗教が違って、私たちは皆、この人生の旅人であると思います。

希望は、私たちが前に歩み続けるための動機や目ざす目標を与えてくれるので、困難や課題に直面しても負けないで、忍耐できる人になると思います。

2000年前、イエスは弟子たちに「彼らに何か食べ物を与えなさい」と言われました。今、私たちはイエス様の教えてくださったことを実行しています。

1月13日(月・成人の日)、釜ヶ崎の三角公園でベトナム料理を作り、地域のホームレスや困っている人々350人分の食べ物を配りました。

聖年の初めに、私たち愛徳姉妹会のシスターズと、なみはやカトリック教会の信者さんたち、そして、聖母被昇天会、守護の天使姉妹修道会のシスターズ、玉造の信者さん方と手を携え、力を合わせて困っている人々に寄り添いました。ベトナム人の技能実習生、留学生、また労働者たちは、ボランティアのグループとして、困難な状況にある人々のために自分たちの時間や労力、さらにはお金を寄付したいと希望して、炊き出しの計画を立てました。

日本で勉強したり働くためにした借金を返済できるかどうかまだ心配している若者もいますが、「自分たちは、他の困っている人々よりもまだ幸せだ」と感じていて、今回のチャリティーのために少しずつでもお金を寄付しあって、集めました。

昨年にも、釜ヶ崎の「ふるさとの家」で、ベトナム人の若者たちと生野教会は150食、なみはや教会は200食のお弁当を作って、ホームレスの人々や生活困難者である人々に配りました。

今回は初めて、ベトナム料理を作りました。人々は、何時間も静かに並んで食べ物を受け取りました。そして、この人達は、食べ物を受け取ると、とても丁寧に「ありがとう」と言ってくれました。彼らは幸せそうに、そして美味しそうに食べていました。その姿を見ると、私たちもとても幸せだと感じました。今回のメニューは、豚バラ肉の煮込みと卵、ゴマを混ぜた菜の花、たくわんでした。別のテーブルには、日本人の大好きなぜんざいも用意され、手編みのセーターや美しい紙に包まれたタオルもありました。

今回私たちはベトナム人だけではなくて、日本人、スペイン人などと力を合わせておいしいお食事を作り、彼らに心を込めて丁寧に分かち合いをすることができました。私たちは、このような活動を通して、すべての人に神様の愛を届けることができると考えています。

聖年とシノダリティは同じ方向に進んでいます。連帯の道は、福音宣教の道だと思います。信仰を持っている人々にとって、聖年は神と自分と周囲の人々との和解や分かち合いを実行する機会だと思います。

原発を必要としない社会の実現を目指して(2)

カトリック六甲教会信徒 古泉 肇

私は4年前までイエズス会の学校で中高生に数学を教えていました。

1970年代以降、世界中のイエズス会学校では「他者の為に・他者と共に生きる人間」というスローガンの下、福音的な正義を実現する人間を育てるという使命を果たすため、教育の改革を進めてきました。私も教科指導だけではなく、宗教教育のなかで社会正義の問題を取り上げるようになりました。

日本では、原発は放射能漏れなどの重大事故を絶対に起こさないという「安全神話」の下、国内のあちこちに原発が造られるようになりました。

その頃私は、原発の電気関係の下請け工事をしていた親戚から、「原発は万一事故が起こった場合にどうするか全く考えていない。こんなに危険なものはない」という話を聞きました。

そして原発で働く人は、下請けの末端の職人であっても、原発に批判的な思想を持っていないか、人間関係を含めて、徹底的に調査するとの事でした。

原発の安全性への疑問、原発誘致の不透明性などの問題がきっかけとなって、私は日本で原発を造ることは福音的な正義に反するのではないかと考え、学校の宗教教育のなかで原発の問題を取り上げるようになりました。

そこで私は原発を身近な問題として考えるため、有志の生徒数十人と共に九州にある玄海原発に隣接する玄海エネルギーパークを見学することにしました。そこで玄海原発に反対するカトリック信徒の市民運動家 A さんに同行してもらいました。

施設のスタッフが、原発がいかに安全で社会の役に立っているか説明する傍らから、A さんはスタッフに鋭い質問をしたり、間違いを指摘したりするので、私達は原発賛成派の主張だけに偏らない学びをすることが出来ました。

特に「原発がミサイル攻撃を受けたらどうするのか」という A さんの質問に対し、スタッフが「原子炉に穴が開くからそこから冷却水を注入すればいい」という「非科学的な答え」をしたことで、私は原発へのミサイル攻撃が想定されていないことを知ったのでした。

「お金を一銭も使わずに、原発を宣伝する施設を使って逆に原発の問題点について学べるから有難い」という A さんの言葉に、巨大企業相手に市民がどう戦っていけばいいかヒントを貰いました。

私達は原発について様々な方向から考えなければなりません。しかし政治、経済、環境、エネルギー等、問題点を細分化すればするほど、結局それぞれの分野の専門家に任せて自らは思考停止してしまいます。逆に「原発賛成か反対か」と問題を単純化しすぎると、対話ではなく対立に終始してしまいます。私は原発の問題に取り組みながら「原発を必要としない社会の実現」を目指して進んでいきたいと思えます。



2024年8月に大阪高松教区の各地域で開催された「平和旬間行事」は、報告集が配布され、味わい深い取り組みの数々が紹介されました。

今市教会からも詳しい報告をいただいていたのですが、当平和旬間準備会事務局の都合が重なり、報告集に掲載することができませんでした。今市教会には、この場をお借りして、深くお詫び申し上げます。

読者の皆さまには、遅ればせながら今市教会の平和への取り組みをご紹介します。

平和旬間準備会事務局一同

大阪北地区 今市教会 平和旬間行事 2024 報告

- 開催日/場所/参加人数
 - ① 8月4日(日)・今市教会・約40名
 - ② 8月11日(日)・今市教会・約40名
 - ③ 8月13日(火)・今市教会・約150名
- 企画の具体的な内容
 - ① アンサンブル(女性合唱) チャリティーコンサート
 - ② 信木美穂さん講演会 「福島のごどもたちとともに」
 - ③ 合同祈念祭
- 計画するにあたって大切にしたこと(ねらいや目的)
 - ① のアンサンブルは、「平和旬間でチャリティーコンサートをしたい」との申し入れが急ぎよあった。個人(グループ)から積極的に平和旬間に参加したいとの気持ちを尊重し、お願いすることとした。しかしメンバーのスケジュールが合わず8月4日となった。
 - ② 原発事故が起こった時の福島の状態、及び現在の状態を知るために、支援活動を続ける信木美穂さんからお話をお聞きすることとした。また、避難区域外から母子避難を続けながら原発賠償関西訴訟原告団の一員でもある森松明希子さんも同席され、避難生活の現状をお話していただいた。
 - ③ 合同祈念祭は、亡くなった方の追悼を例年通り行うこととした。
- 平和旬間を終えて 全体を通して気づいたこと、良かったこと
行事を2回に分けて行った事と、11日は第13回全国カトリックスカウト・キャンポリーと重なった為、参加者が少なくなると危惧したが、2回の行事はそれなりに参加者が多かった。
前もって、チラシの配布やポスターを大きくしてPRを行った結果と思う。
- 参加者の思いや感想
 - ・ ミサ後のアンサンブルチャリティーコンサートであったが、42,360円の募金が集まり、カリタスジャパン「国内援助」に寄付した。
 - ・ 当時の福島についての知らない事や、現在を知る良い機会になった。
ただ、今年は大きな行事と重なったので、行事の日程を平和旬間期間外に行う事も検討が必要。

アンサンブルチャリティーコンサートの模様



信木美穂さん講演会の模様





ガザにおけるジェノサイドと停戦をめぐる動き

——ガザの人々が祖国で自由に暮らせる日が来るのでしょうか？——

カトリック夙川教会 西口信幸

トランプ政権直前の1月16日、ガザ停戦の駆け込み報道がありました。1年以上、死の恐怖から片時も逃れることができなかったガザの市民が一夜でも安心して眠れる日がきたことは嬉しい出来事です。

停戦が少しでも長く続くよう祈りますが、イスラエルがトランプ政権への恭順を示す「停戦」のあと、ガザ、そして西岸に平和(=人権侵害がない世界)が訪れるのか厳しい現実が待っています。1948年のナクバ(民族追放)、1976年の占領(居住地追放)、2007年の「天井のない監獄」を軍事的に支援し、ガザのジェノサイドでは武器供与、後方支援で全面協力してきたアメリカの国連支配の構造は揺るぎなく、アメリカの掲げる「民主主義」の下で世界は沈黙を続けています。「力による平和」はガザの土地と主権をさらに奪い、西岸も含めたパレスチナの「完全イスラエル化」に限りなく近いものになっていくのでしょうか。この3ヶ月、報道されることなく計画的、継続的に行われつつあることを11月ニュースの速報で触れ、今月号でお伝えしようとしていましたが、停戦の動きがあり、いくつかの紹介の場とさせていただきます。「ジェノサイド後」は次月以降に新たな動きを整理した上で、改めて掲載させていただきます。

「停戦」後も続くガザの人々の危機的な現状

ヒロシマ原爆6個分の爆弾で復興には350年かかるとの試算もあります。20万人以上の市民、多くの子どもが殺され、2万人以上の重傷者が放置され、190万人の避難民は風雨の中、超過密キャンプの簡易テントで、イスラエル軍の援助物資の搬入妨害により飢餓状態で、幼児の凍死を防ぐこともできません。人々は「人間が考えられる絶望をすでに超えた」限界状態の中で何が起きてもおかしくない状況です。

★ 停戦合意を受けて、パレスチナからのメッセージ —— 次ページに全文

現地のパレスチナの方から一つのメッセージが届きました。この一年を振り返り、現地の状況を冷静に捉え、レジリエンス(しなやかさ)にあふれた、ガザの人たちの心を伝える良いメッセージです。停戦は疲れたガザの人々にとっては砂漠の中のオアシスになることは間違いありません。しかしながら灰塵に帰した祖国、懐かしい文化、奪われた家族、生活、文化を支えるリーダーの命はもどってきません。白紙からの再生です。その加害者は罰されることもなく、さらに奪い、従属化を進めようとしています。その現実の中でガザの人々は大惨事ナクバを天災かのように「神が与えた試練」として、怒り、恨むことなく「殉教者」を祀り、現実を謙虚に受け入れ、明日への希望に繋げようとしていることに、本当の信仰を持つ人のような崇高な姿勢に感動を覚えます。ぜひ、ゆっくり読んでみてください。

★ 「先住民パレスチナの抵抗への覚悟」 スーザン・アブルハウさん

イギリスで昨年11月に開催されたディベートでのよくまとまった演説があります。日本語字幕付きのYouTubeと、文字起こし版Webのアドレスを掲載しましたので、ぜひご覧ください。77年間の民族浄化とジェノサイドについてガザの人々の苦悩がよくわかる感動的な演説です。

<https://chikyuzo.net/先住民パレスチナ人の抵抗への覚悟/>

https://youtu.be/sQsLDVZRbs?si=8V6b36NX_3wrBsMT



★ 「ガザ・ストロフーパレスチナー^{うた}吟」上映会 —— シナピス協賛(同封チラシ参照)

3月22日に夙川教会、そして29日に尼崎市で、ガザ封鎖直後の2008年のイスラエルによる攻撃のドキュメンタリー映画の上映会が「すばる福祉会」という福祉団体の主催で開催されます。

ハマスの蛮行への報復と言われる2023年10月からのイスラエル侵攻を振り返って考える良い機会となります。

これからもガザ、パレスチナに目を向けて、ともに祈りください。

停戦合意を受けて、パレスチナからのメッセージ

日本の友人の皆さんへ

パレスチナ・ガザ地区における流血と破壊に対して、世界が「もうたくさんだ」と言うのに、15カ月という長い月日がかかるとは想像もしていませんでした。全世界の目の前で繰り広げられたジェノサイドは、あまりにも長く続きすぎました。

ガザの人びとがいま抱えている感情には、深い葛藤があります。一方では、容赦なく続く爆撃に終止符が打たれることへの安堵があります。一方では、奪われた命、瓦礫と化した家、徹底的に踏み躪られた夢と思い出といった、この間に失ったものの大きさを考えはじめると、深く、困難な悲しみに襲われるのです。

多くの人びとにとって、「平和のうちに」嘆き哀しむ時間が訪れるでしょう。もう戻ってくることはない、愛する者を数え、かつては生活と喜びに満ちあふれていた住まいが灰と化した廃墟の中を歩くことになるでしょう。その破壊が物語っているのは、兵士たちが新生児を殺すことを堂々と自慢するほどの血に飢えた占領というものの残虐非道さです。

しかし、この瞬間はまた、パレスチナ人の並外れた回復力とスムード（不動の抵抗精神）を浮き彫りにしています。想像を絶する犠牲にもかかわらず、自分たちの土地に深く根ざし、自分たちが土着の土地の守り人であることを自覚しているのです。1月19日に発効が予定されている停戦は、休息が訪れる瞬間ではあるものの、正義が果たされる瞬間ではありません。実際に、停戦が近づいてもなお、イスラエル占領軍は爆撃を続け、虐殺を続けています。悲劇的なことに、こうした凶悪な戦争犯罪の加害者たちは、これまで同様に責任を逃れることでしょう。

停戦は、占領の終結を意味するものではありません。ナクバ（大厄災）は続き、ガザでもヨルダン川西岸でも、占領者による抑圧はさらなる破壊を与えようとしています。しかし、このような残忍さに直面してもなお、パレスチナ人の回復力は希望の光として輝いています。

私たちは、2023年10月に殺害された私たちの大切な同僚であるイスラム・アリさん、そして46,000人以上の失われた命を悼みつつも、今もガザにいる同僚たちが無事であることに特に感謝しています。

世界は今、真実を知っています。私たちは、国際的な連帯、そしてイスラエルによる残虐行為を糾弾するために各地で上がった声に、深く深く感謝しています。こうした努力の集合は、私たちパレスチナ人が支持されるべき存在だということを示してくれました。しかし、まだ終わりではありません。パレスチナが自由になるその日まで、パレスチナのための声をどうか上げ続けてください。

最後になりますが、今後のガザ地区の復興のためには多大な努力が必要であり、私たちUAWCは、すでにそのための計画を立て始めています。皆さんにもぜひご協力いただきたいと考え、近日中にその呼びかけをさせていただきますが、どうか今は、この停戦が維持され、恒久的なものになることを共に祈ってください。

2025年1月16日

ヨルダン川西岸地区ラマツラにて

パレスチナ農業開発センター（UAWC）代表 ファッド・アブセイフ



パレスチナ西岸を拠点とする非営利団体、パレスチナ農民の支援を目的に1986年に設立、農地の開墾、復興や、農産物の販売支援を行なっている。(株)オルター・トレード・ジャパンを通してオリーブ油を日本にも販売、2024年、来日してガザの支援とパレスチナ連帯を訴えている。オリーブの木は「パレスチナの魂」、木を略奪から守り、オリーブ油を生産することは、土地の収奪を防ぎ、パレスチナ人の心の支えになっている。

「合理的配慮ってなに？」 その4

それは、障害を持つ人が、障害を持たない人と同等の機会を得るために、事業者が提供しなければならない対策や設備のことです。

これらの具体的な対策や設備の提供は、2024年今年4月1日から努力義務ではなく、義務とされています。

(参考)「合理的配慮」の英語は“Reasonable Accommodation”です。「納得できるお互いの調整」と訳すと分かり易いです。「無理をしなくてよいのなら、やらなくてもよい」ということにはならないのです。

(シナピス 10月号の補足説明)③

内閣府のパンフレットから

- 本法における「障害者」とは、障害者手帳を持っている人のことだけではありません。身体障害のある人、知的障害のある人、精神障害のある人(発達障害や高次脳機能障害のある人も含まれます)、その他心や体のはたらきに障害(難病等に起因する障害も含まれます)がある人で、障害や社会の中にあるバリアによって、日常生活や社会生活に相当な制限を受けている人全てが対象です。

例1: 高齢者になるといろいろな機能が衰えてきます。肢体不自由者ではないにしても、

ちょっとした段差や坂で転倒します。階段ではなく、緩やかな坂が楽です。

1階が駐車場で2階が聖堂のところも多く、エレベーターがあると助かります。

視覚の衰えで、小さな文字では配布物が読みにくいです。聖書と典礼の大型判のように、大型文字の配布物があると助かります。

聴覚の衰えで、小さな声や早口の会話が聞き取りにくくなります。

ゆっくりと滑舌よく話してくれると助かります。

例2: 外国語を母国語としている人々にとっては、日本語はとてもむずかしい言葉です。

同音異義語や慣用句などへのわかりやすい説明を交えての日本語をお願いします。

※文字表示(要約筆記)も大変助かります。

例3: 障害者手帳には、身体障害・知的障害・精神障害の3種しかありません。

多くの発達障害を持つ人が障害者手帳を持っていません。しかし、発達障害を持つ多くの人が視覚や聴覚が敏感であることが多いです。うるさすぎる音が苦痛であったり、雑音が気になったり、まぶしすぎる照明が苦痛であったりします。

※それぞれ当事者と教会が話し合うのが良いでしょう。

☆内閣府のリーフレットをダウンロードしたい方はこちら

https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/sabekai_leaflet-r05.html





二人の青年の「沖縄訪問」報告から生まれた喜び

シナピス事務局 大森 雄二

昨年6月23日の沖縄慰霊の日に合わせて、誰かに現地を訪問してほしいとシナピスが考えたところ、30代前半の社会人である、阿倍野教会の嶋田 奈々さん、有谷 絢さんのお二人が手を挙げてくれました。

昨年末、このお二人の報告を聞く集まりを企画しました。半年も時がたち、少人数の集まりにしかならなかったのは、とても残念なことでしたが、にもかかわらず、この集まりからは、「未来のシナピスを照らす希望が垣間見えた」――参加した人全員がそんな喜びに包まれた集まりでした。

報告を聞いて、学生時代から広島巡礼に参加し、卒業後は引率するスタッフを続けたお二人の中には、広島での学びがしっかりと根を張っていることが理解できました。

広島と沖縄を比較した報告は、聞く側として新鮮なものでした。日本軍の盾として、本土を守るための時間稼ぎとして利用された沖縄戦について、また敗戦後も、米軍の捕虜収容所で、栄養失調やマラリアに苦しんだ住民たちのことなど、改めて心に刻むことができました。

追悼の面でも、6月23日を休日として県民をあげて追悼を表す姿勢や、平和祈念公園内の平和の礎に、国籍や軍人・民間人を問わずにすべての犠牲者を母国語で表記して追悼する姿勢は、広島を知るお二人には驚きだったようです。

「行ってから気づいたことが多くて、まだ消化できていない」というお二人の言葉に重いものを感じました。そこには、現地を訪問したからこそ実感できたことに加えて、琉球王国からの歴史を知らなかったという気づきや、基地があり、米兵がいることで引き起こされてきた様々な問題を、沖縄の人々が腹わたを揺さぶられる思いで『肝苦（ちむ）ぐりさ』（沖縄の言葉で、「あなたが悲しいと、私も悲しい」の意）と感じ、声を上げてきたように、本土の私たちも感じ、行動を起こしていけるかという自分たちへの問いかけも含まれていたように思います。

後半の分かち合いでは、シナピスから「平和や人権について、あるいは身の回りの社会問題について、何か行動を起こしたいという人たちと、シナピスはどんな形で協力できるか」というアイデアをたずねました。

日本で暮らす難民の力になりたいとの思いで法学を学ぶ中井ルネさんは、「とにかく仲間が欲しい。シナピスが同じような思いを持つ仲間との出会いの場になればうれしい」と話し、枚方教会信徒の絹川 誠さんは、スタディサークルや読書会に参加する経験の中から「なぜ、その問題に取り組むのか。その“なぜ”を意識して、そこの分かち合いを定期的に行うことが大事だと思う」と話してくれました。最後に有谷さんは「シナピスはもっと発信型のマインドで参加を呼び掛けて欲しい。そのためにできることがあれば協力します！」との心強い言葉を残してくれました。

次世代へのバトンタッチを進めたいシナピスとして、これからのためにやらなければいけないことをはっきりと教えてもらった、そんな時間を私たちスタッフがいただいたように思える報告会となりました。

45周年を迎える「すばる福祉会・すばる舎」

—重いハンディがある人も、地域で普通の生活を営むことができる！—

「すばる」が発足したのは、1980年2月17日ですから、今年の2月に45周年を迎えます。

当時、西宮市内の山の中の収容施設にいた3人が、街の一角の住宅に引っ越しました。社会制度が未整備の中で、西 定春さん（現・すばる福祉会理事長）が始めた、街のなかの小さな家での生活でした。

初めて自分の「家」で生活を始めることになった人たちは、目を輝かせたそうです。「自転車で自由に外出できる。自分のお金で買い物ができる。工場に働きに行く人や作業所に通う人は、朝出かけて夕刻に帰って来る…」という生活を始めたのです。「重いハンディがある人も、当たり前で地域で普通の生活を営む」という「すばる」の実践が始まりました。

収容施設からほとんど出たことがなかった重いハンディがある人も、配達したり集金したり、街の中で人と接する生活を楽しみました。車や電車で各地に出かけたり、毎月ハイキングにも行き、重いハンディがある人がこれほど地域生活を楽しむことができることに、西さんも感心するほどだったそうです。

私が「すばる舎」の働きに最も驚き、感動したのは、1995年の「阪神・淡路大震災」の時でした。地元で最初に炊き出しを始めたのは、重い知的ハンディを持つ「すばる舎」の皆さんだったのです。また、独居老人を訪ねてお弁当を届ける活動を始めたのも彼らでした。「すばる舎」の各施設も震災で大きな被害を受けながらも、地域の被災者のためにお弁当作りをし、人助けのために尽力している姿に刺激されました。

その後、日曜日には教会に「無添加パン」の販売に来ていただいたり、バザーでたこ焼きを販売していただいたり、信徒がアルミ缶を集めて届けたり、古紙を回収していただいたり、すばる舎の方との交流が密になっていきました。

2011年の「東日本大震災」では、地震が発生した週のうちに救援に出かけ、以来福島県から岩手県までの被災地を50回以上炊き出しのために回っておられます。能登半島地震の被災地にはこれまで



5回の炊き出しに出かけ、たくさんの麺に山盛りの具を乗せて提供しています。

1回あたり約10万円の経費を募金と寄付金で賄っているそうです。

これまで、北海道の有珠山の噴火、新潟中越地震、福井や兵庫や広島の水害、熊本地震にも、救援に出かけました。また、2022年からは、ウクライナにカイロや目薬を贈る活動を行ってきました。

西さんは癌と闘いながらも、昨年6月にウクライナを訪問されました。「ロシアのミサイルが飛んでこないだろうか？」という不安を持ちながらも、「すばる舎」が集めて送った2万個のカイロと、ある大企業の会長さんから頼まれてウクライナに届けた20万個のカイロがどのように行き渡っているかを知りたいという思いがあったのです。ウクライナでは、どこを訪れても、カイロのお礼・感謝を伝えられ、カイロが戦時下のウクライナの人たちを暖めたことが良く分かったそうです。

すばる舎がウクライナに贈るカイロを募集した時、阪神地区のカトリック教会に呼びかけをしたところ、多くの皆様からカイロや輸送費のための寄付をいただきました。本当にありがとうございました。

また、すばる舎の美味しい「無添加パン」やクッキーを日曜日のミサ後やバザーで販売させていただき、購入していただいている皆さまにも感謝いたします。多くの方にすばる舎のことを知っていただき、優しい社会を創っていきたくと願っています。（カトリック仁川教会 社会活動委員会 土器屋 香代子）

心つながり支えあい 優しさの世界を創ろう

あるべき福祉実践を考える集会（すばる福祉会創立45周年記念）入場無料

2月24日 9:30~15:30 午前の部：西宮市高木公民館講堂

午後の部：西宮市瓦木公民館講堂

社会福祉法人すばる福祉会・NPO法人すばる舎 663-8003 西宮市上大局5丁目1-8

☎0798-53-0122 FAX0798-53-4191 理事長 西 定春

「すべてのいのちを守る教会をめざして—ハンセン病問題 過ちを繰り返さないために」

シナピス事務局 岡田雅代

2024年11月1日、「すべてのいのちを守る教会をめざして—ハンセン病問題 過ちを繰り返さないために」と題する冊子（以下「冊子」）が、日本カトリック司教協議会 社会司教委員会から発行されました。

司教団は、2017年7月に「ハンセン病に関わる日本カトリック司教団の謝罪声明」（以下「謝罪声明」）を発表したのですが、当事者の方々から「内容が不十分である」と厳しい批判を受けていました。この批判を重く受け止め、「日本のカトリック教会が同じ過ちを二度と繰り返さないために、何をしなければならないのか、何ができるのかを皆で考えよう」と新たに発行されたのがここで紹介する冊子です。そもそも「謝罪声明」とは、2005年3月に出された「ハンセン病に関する検証会議最終報告書」（以下「最終報告書」）を受けて出されたものです。そしてこの「最終報告書」というのは、ハンセン病療養所の入所者が原告となり、「ハンセン病者の絶対隔離政策は基本的人権を保障した日本国憲法に違反している」と国の責任を問うた裁判で、2001年、国の違法性と過失が認められたことを受けて設置された「ハンセン病問題に関する検証会議」によってまとめられたものです。

「最終報告書」では、キリスト教が果たした役割として特に、入所者に「隔離の受容」を植え付けたことが強調されています。「病気とそれゆえの隔離の苦しみを受容し耐え忍び、それを喜びと変えて療養生活を営んでいくための支えとして、キリスト教は役割を果たしてきたと言える。……ここでこの信仰の世界とは隔離政策を受容し、自分の病気の苦しみを犠牲として神に捧げることにつながり、宗教あるいは信仰の果たす役割は、いわば『納得の装置』とみなされている」と述べられています。さらには、「人間の尊厳が踏みにじられることへの最後の防衛手段、それは、尊厳が踏みにじられているという事実を覆いを被せてしまうことである。……宗教者による『慰安』『救済』という名の『教化』が、隔離の現実を覆いを被せる、そのことは、ある意味で、究極の人権侵害ということもできよう」とまで述べられています。

ハンセン病問題の中には、すべての人権問題が含まれていると私は思います。個人で、あるいはグループで、ぜひこの冊子をお読みいただき、ハンセン病問題をはじめとする人権問題について、考える機会にしていいただければと願います。

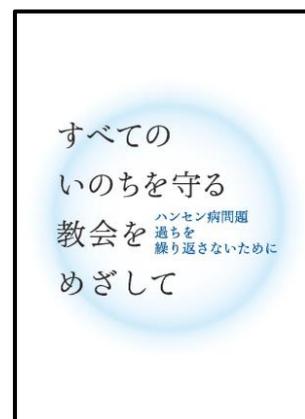
*この冊子は、カトリック中央協議会のホームページ

諸文書>日本司教団関連文書>社会司教委員会から、

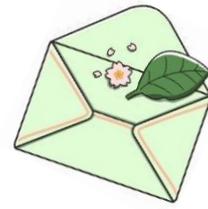
あるいはこちらのQRコードから、ダウンロードが可能です。

冊子本体をご希望の方は、中央協議会（社会福音化推進部）

にメール（social-concerns@cbcj.catholic.jp）でお問い合わせください。



シナピスホーム便り



シナピス事務局 山田 直保子

読者のみなさま、お久しぶりです。

シナピスホームは、2024年12月に4周年を迎えました。5年目となった2025年も、難民移住者と共に居心地の良いカフェを開催できるよう努力していきます。みなさま、どうぞよろしく願いいたします。

4周年記念ランチは、何度もミーティングを重ね、「全員が一品ずつ作り、それをプレートにしよう！」と、全員が「いいね！」と一致したアイデアが実現しました。

ブラジル：「フランゴ アサド（味付けをしたチキンを揚げたもの）」と「トルタ（野菜とお肉を重ねたタルト）」、ミャンマー：「ワッターアルー（豚肉とじゃがいもを煮込んだもの）」、イラン：「ゴルメサブジイー（様々なハーブや乾燥ライムを煮込み独特の酸味を出したシチュー）」。そして、皆さん全員が提案した日本料理は、「クリームシチュー」！

「クリームシチューなんて、外国でも普通にあるじゃないの？」と聞くと、「ビーフシチューはよくあるが、クリームシチューは日本で初めて食べた」と言うのです。



ブラジル料理、ミャンマー料理、イラン料理、そして日本のクリームシチュー



全員で力を合わせて作ったフルーツたっぷりのホールケーキ

そして、全員で力を合わせて作るクリスマスケーキ。イチゴや桃、ぶどうにアプリコットなどフルーツがたくさん入ったホールケーキ。

そこに今回はHさんのアドバイスで、説明がなくても誰が作ったものか、どこの国の料理かわかる各国の旗を立てようと言いました。皆さんも、「わかりやすいかもね」と賛成し、私は各国の国旗を印刷し、つまよう

じに貼っていく作業をしたり、ランチ前日は各自で買い出しに出かけ、下準備をホームで行いました。夕方には、自立していったミャンマーのA君が遊びに来て、たくさんある各国の国旗を発見。「これは何に使うの？」と聞くので、経緯を説明しました。

「それはわかりやすくして良いアイデアですね」と前置きしつつも、「私たちの旗はこれじゃありません」と笑うので、何か間違ったのかと尋ねると、「この旗は政府のものです。でも私たちは違う旗を使っています」と言いました。

そこで気づきました。「私はなんて浅はかなことをしてしまったのか！政府に反対して、命からがら日本に来た人たちに国旗を掲げる行為をしてしまった！なんて平和ボケしているんだ」と震えました。そして、すぐに全員に謝りました。

イラン人は「イランの国旗はアラブの字、ペルシャ語ではない。考えてみてください、日本の国旗に例えば、他の国の言葉が書いてあったら嫌でしょう？だから、私たちはみんな、あの国旗が嫌い」と教えてくれました。



私はすぐにこの作戦は中止しようと申し出ましたが、「ダメダメ、とても良いアイデア。一回見たらすぐ誰が作ったかわかる。どこの国の料理かすぐわかる。国旗が嫌いとは別にしてください」とイラン人は言いました。

傷つけてしまったと後悔している私はとても悩みましたが、こう言われて、そのままお出しすることになりました。

ランチ開催日、お客さんでにぎわい、ランチのワンプレートも国旗も大好評でした。難民移住者全員が料理の説明を行い、「美味しい」というお客さんの声に皆さん笑顔でした。

私はお客さん一人一人にこの国旗に関して、前日にあったことを説明しました。提案してくれた H さんの国は自分から戦争を仕掛けたことは一度もなく、国旗を誇りに思っていること。ミャンマーやイランは国旗に複雑な思いを抱いていること。浅はかな私はこの料理に国旗を立てることに何の疑問もわかなかったこと。イラン人たちも一緒にお客さんに説明してくれました。お客さんたちも私と同様に「そこまで考えていなかった、すごく勉強になった、ほかの人にも今日の話をしたい」と話してくれました。

私たち日本人にとっては、なんということのない日常の出来事一つ一つ、物事を深く考えていなかったことを反省しました。

そのあと、手作りのクリスマスケーキを皆さんにお出しして、コーヒータイム。

ミャンマー人 A 君のギター弾き語りから始まり、全員でジョンレノンの「ハッピークリスマス」を大合唱！歌が苦手な難民移住者も口ずさんでいて、とても良かったです。

センター長の松浦謙神父様からホームの祝福を受けて解散となりました。

終わった後も、反省しきりの私を気遣っているのか、皆さんが「今日の旗は良かったね」「見てすぐわかるのいいよね」と話してくれました。

この、人を思いやる優しさに私はどれだけ助けられてきたかわかりません。

甘えないで、これ以上彼らを傷つけないように、「ちゃんと考えて行動しなければ」という思いを強くしました。

本当にいろいろな思いで胸がざわざわしたランチでした。



シナピス事務局こぼれ話

ビスカルド篤子

1月7日 「お父さんが死んでしまう」の声につき動かされて

夜遅く、電話が鳴りました。「父が呼吸困難で顔が土色になって、救急搬送されました。助けてください。」初めて聞く声の主はサリさん（仮名）という若い女性でした。両親は20年以上仮放免が続いており、父は糖尿病と高血圧と鬱病を患うが保険がないので治療もままならないといえます。話を聞くうちに、サリさんの父親が私の知るクルド人のアユーブさん（仮名）だとわかりました。20数年前、まだ茨木市に西日本入管センターがあった時代に私もよくアユーブさんに面会していたのです。アユーブさんは9月にも脳出血で倒れましたが、今回はインフルエンザから肺炎と肺血栓を引き起こしたそうです。サリさんは思いつく限りの人に助けを求め、彼女の悲痛な声に突き動かされた人たちが遠い東京や大阪から「人道配慮による特別在留許可」を求めて既に動いていたのを知りました。



妻と娘に介抱される
アユーブさん

1月8日 私にもできることは何でしょう

私は病院へ行き、アユーブさんを見舞いました。恰幅の良かったアユーブさんの見る陰は、もはやありません。彼の手を握って「今、たくさんの日本人があなたのために動いているよ」と言うと、灰色だったアユーブさんの瞳が潤い、涙が流れました。「私は生きたい。」

私は主治医やケースワーカーと医療方針や医療費について話しあい、診断書を持って名古屋入管へ行きました。あちこちで動いてくれる人に連なって私もできることは何でしょう。

1月0日～△日 活動センターの助け合い日誌

今日も多くの人が動きます。

言葉や制度のわからない人に代わって年金事務所や区役所へ。ビザ更新手続きや難民調査の同行。強制送還の危険性のある人の出頭寄り添い。仮放免の人の病院探しと付き添い。海外から妻を呼び寄せたいのに「所得の低さ」が理由で不許可となった夫と入管へ抗議・相談。シェルターでの掃除を巡る国際喧嘩の仲裁。近隣住民から警察へ通報された人の対応。事務局で仕事をするスタッフのそばに立って朝夕電話の不具合を訴える人への相槌。結婚した人の喜びの分かち合い…。1月8日に事務局を開けてから2週間の日常です。

ドクター新庄による歯科往診と、村木正靖さんによる難民たちへのマッサージデイは、年明け1月に再開しました。

お米や食料品を運んでくださる人も、シナピスのテーブルでラーメンを食べにくる空腹の人も、皆さん顔を出すと「今年もよろしく」のご挨拶から始まりました。

そして、日本各地から「祈ってるよ」、「活動を絶やさないでね」と声を届けてくださる方、「しっかりね」と寄付を送ってくださる方。これぞシナピスの元気の源です。

さあ2025年は誰と出会えるか、どんな学びがあるか、何ができるか。

「からしだね」の運動がさらに広がりますように。

「阪神・淡路大震災から 30 年」に、考えさせられたこと

シナピス事務局 大森 雄二

1月18日、「若い世代に語りつぐ——阪神・淡路大震災 30 年に寄せて」と題された集会に参加しました。主催は『小田実を読む会』とあり、学生時代に小田実さんの本を読み漁った者として、惹かれるものがありました。会の冒頭、挨拶された山村 雅治さん（市民＝議員立法実現推進本部）の話を聞いて、この集会に集まった方たちが、『被災者生活再建支援法』を作る市民運動を担った方々であるとわかりました。

集会には衆参の国会議員が一名ずつと、神戸の市議会議員も参加しており、この法案が、市民がたたき台を作り、賛同する議員たちと練り上げた『市民＝議員立法』と呼ばれるゆえんを感じました。

98 年に一応は成立した同法ですが、2007 年に可決された改正法によって、はじめて住宅の再建に利用でき、支援額も 300 万円にまで増額されました。

昨年の能登半島地震では、この支援法が、被災者を切り捨てる基準となってしまう現実があるそうです。自治体による家屋の被害判定で、半壊とされると、支援から取り残されるからです。

集会の最後には、以下の宣言が読み上げられました。「・・・いまこそ『市民＝議員立法』の原点に立ち返ろう。『公的援助金』の飛躍的な増額を。この国には『自助努力』できない喘ぐ被災者が能登には数あまたいる。これは『人間の国』か」。

もう一点、心に刺さったのが、「もしあの地に原発が建設されていたら・・・」という指摘でした。

原発について、支援法について書ききれなかったことと併せて、次号のニュースで報告する予定です。



表紙の写真に寄せて

シナピス事務局 岡田 雅代

「阪神・淡路大震災から 30 年『1.17 追悼のつどい』」が、たかとり教会において行われ、近隣や信徒の方々、様々な宗派から来られた僧侶と司祭が祭壇を囲み、祈りました。その祭壇からは、ろうそくの灯と焼香の煙が立ち昇り、集まった方々のそれぞれの思いが天に向かっていくようでした。信じる宗教も立場も、思いも一人ひとり違いますが、たくさんの「ともに」がそこにはありました。夜明け前の薄暗い聖堂の中で、私は闇をつたうように広がっていく般若心経の響きに身をゆだねながら、「あの日も、そして今日まで、生かしていただけてきた。これからも一生懸命生きたい」との思いが強められるのを感じていました。

祈りの後には、具沢山の豚汁が振る舞われ、冷えた身体にしみとおる温もりに感謝しながら、当時の炊き出しのことや、水の確保に奔走したことなどを思い出しました。

たくさんの準備をしてくださったたかとり教会の皆さま、ありがとうございました。

震災のための祈り ～東日本震災後 167 カ月目を迎えて

震災の祈り（テゼの祈り）：2月11日（火・祝）11:50～

聖パウロ会大阪修道院（大阪高松教区）大阪市西淀川区姫里 2-2-15

世界各地で発生した天災や紛争などによる犠牲者、被災により苦しい生活をされている方々のためにも祈りましょう。問い合わせメール：frabeko0519@yahoo.co.jp（Br. 阿部光一）

震災のための祈りは、毎月 11 日に行っています。

活動へのご支援ご協力を
よろしく願いいたします。



電化製品、お米・乾麺・調味料、
日持ちのする食料品、外国語の聖書のご寄付をお願いします

*比較的新しい家電製品やミシンなど
*日本語の聖書は不要です



お電話をお待ちしています！！

☎06-6941-4999



シナピスホーム (カフェ)

2月の予定

カフェ：1日、8日、22日
ランチ：15日

- ★土曜日の13時頃～16時頃
- ★ランチは要予約
(電話 06-6942-1784)



HPはこちらから

<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

ニュースレター配布停止ご希望の方は
シナピスまでお知らせください。

あとがき

毎年、今頃にシナピスのスタッフと運営委員とで、泊まり込みの研修会を開いています。今回は初めて、高松の桜町教会に隣接するカトリック会館を使わせていただきました。

この1年間の活動をゆっくりとふりかえり、今後の計画に思いを馳せました。また「私たちはなぜ、社会問題に取り組むのか」というテーマについても、各人が思うところや不安に感じることを語りあい、ふだんは得られない「ぜいたくな時間」を過ごすことができたと思います。

シナピスは「社会活動センター」という名のとおり、活動することが仕事です。悩みを抱えた人たちと関わり、彼らがより良い暮らしができるように支えます、そのために、ふだんから行政や企業、NPOなど多様な人たちとのネットワークを作っておくことも必要です。あれもこれもと、目の前の業務をこなすことに夢中になっていると、ふと自分のやっていることの意味を見失うことがあるかもしれません。

今回の研修会では、スタッフのケアもテーマになりました。誰かを支える人たちを、まわりの人たちが支え、心の元気を取り戻す。問題が複雑化し、解決に時間も労力もかかるケースが増えてきました。日頃からこのような支えあいの関係性を保っておくことも、これから大切なことなのでしょう。(いたる)

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆広報活動

- ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等
社会活動の指針の伝達
- ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ
機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携

◆学習会研修会の企画

◆こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

◆日本カトリック司教協議会との連携

正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、
カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣

◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ

◆難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪高松大司教区事務局内



●公共交通機関ご利用の場合

JR 森ノ宮駅より 約 1000m

地下鉄中央線森ノ宮 2 番出口より 約 800m

JR 玉造駅より 約 1000m

地下鉄長堀鶴見緑地線玉造 1 番出口より約 800m

●車でお越しの場合

阪神高速 13 号東大阪線法円坂出口

法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします

☐郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪高松大司教区

代表役員 前田万葉

☐三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958

カトリック大阪高松大司教区 シナピス

代表役員 前田万葉

☐オンラインはこちら →→→

